

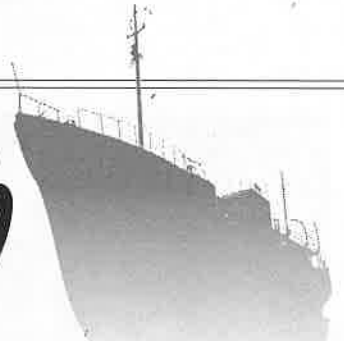
2010.05.01
No.357

(5・6月合併号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



ヒロシマ・ナガサキ65年――

原爆の子・片岡 脩 平和ポスター展

2010年5月9日―9月23日



原爆忌ひと日ひと日の生きざまよ

片岡 脩

被爆後大怪我を負う二人の友を救護所に運び、その友を亡くす。片岡さんの作品には死者への鎮魂と生き残った者の深い想いが宿ります。今回24点の作品が展示されます。

広島・長崎原爆投下から六五年目の夏にむけて、核兵器のない世界をもとめる声のひろがりとともに、あの日の惨禍、かろうじて生き残った人びとへの想いをめぐらせて片岡脩さんの平和ポスター展が開催されます。

おりからニューヨークの国連本部では核不拡散条約再検討会議が開かれ、日本からも被爆者五〇余名をはじめ、第五福竜丸元乗組員の大石又七さんも初めて渡米し、ピキニ・ヒバクシャとしての訴えをひろげます。五月二日にはアメリカの反核運動、内外各地から参加した市民運動も合同して、ニューヨークで大規模なデモンストレーションがおこなわれます。大石さんは、第五福竜丸の大漁旗（複製）をかざし、訴えのチラシを配りながら歩きたいと抱負を語ります。

*

展示館では、四月四日まで延長された黒田征太郎展「核なき地球へのメッセージ」にたくさんの方々が来館しました。この作品は四月七日から大阪で展示され、さらには八月には長崎での展示会が企画されています。

四、五月の展示館は、修学旅行のシーズンです。ウイークデーは五校、六校と来館し、ボランティアガイドも人数を増やして対応し話をするとともに、生徒達であふれる館内整理などにもおられます。

説明を聴く生徒たちのまなざしに、戦争も核兵器もない世界の実現へと人びとの輪が広がることをねがいます。

核のない世界を

つくるために！

3・1ビキニ記念のつどいに二二〇人

二〇一〇年3・1ビキニ記念のつどいは、三月六日に港区白金の明治学院大学国際会議場で開かれました。

今回のつどいは第五福竜丸平和協会と同大国際平和研究所の共催による市民講座としてもたれました。講演は広島平和文化センター理事長のステイブ・リーパーさん、明治学院大学の高原孝生さんが問題提起をおこない被爆者



の山田玲子さん、詩人のアーサー・ビナードさん、戦後補償研究者の石田隆至さんがコメントしました。

今回の講座は、五月の核不拡散条約再検討会議への注目が集まるなか、核兵器のない世界を求める世論や運動の広がり、米オバマ大統領のプラハ演説など核兵器問題への関心が高まるもとで、協会と平和研究所が協議を重ね準備されました。

* つどいは『ヒロシマ・ナガサキ議定書を読む絵本』のライド上映と絵本の郡読により始まりました(上の写真)。六歳の少女、四人の大学生、大人三人による読み手から、議定書条文をわかり易く書き下した言葉と被爆者のねがい紹介され、「約束はひとりではできない」と核なき世界への努力をよびかけました。

開会挨拶は、協会の川崎昭一郎代表理事からおこなわれ、奥山修平協会理事と市田真理学芸員とが進行し、閉会

記念講演より

殺さない—平和の文化を

ステイブ・リーパー

『ヒロシマ・ナガサキ議定書を読む絵本』の冒頭に黒田征太郎さんは「人類は殺して殺して殺してばかり」と書き

ました。広島市の森滝市郎さんは、被爆により五カ月間病臥するなかで原爆の意味について考えました。「これからは人間は破壊とか暴力により物事を決めることはできなくな

った」と。人類は、暴力を用いて領土を拡大し、それをよいこととしてきました。帝国を築きながらに拡張しようとし、やがて

衰退し破滅が来るとまた、巨大な暴力が振るわれてきました。強い支配者が君臨すれば暴力は止み、一時的に平和がきます。この繰り返しでした。

原爆を体験した森滝さんの洞察は、「暴力による支配の発想を転換しなければ人類は

には竹尾茂樹平和研究所長が挨拶しました(講演、コメントーターの発言は編集部で要約しました)。

生き残れない」というものです。それは力の文化から愛の文化への転換の必要性を示すものです。

核の登場とは力の文化の終焉を意味しています。人類は果たして戦争の文化から卒業できるでしょうか。

戦争の文化は、自分のため、家族のため、組織のため、国のためという発想に立ちます。平和の文化とは、個人や組織を超えた共通の利益、つまり国という概念を超えて人類という視点で物事を捉えるものです。

今日の世界は、解決のためいろいろな努力するのですが、いよいよ負けそうになると暴力に訴えてしまう。平和の文化とは、そこで相手をやっつけるよりは負けるほうを選ぶ、これは非常に難しいで

すね。戦争より難しいと思います。

力の文化からの脱却を

世界は核と環境問題の解決が必要です。

きょうの集いはビキニデーを記念するものです。この水爆はとんでもない破壊力で、広島原爆など比べようもないものです。こうした核を持ち、人間自らが人類を絶滅させる力をもったわけです。数人の軍人、支配者に我々のいのちが握られているのです。

にもかかわらず、私たちは本当の意味の「協力」を身に付けていないし、真剣に暴力を捨てようとしていないのです。中国や北朝鮮が攻めてきたらやり返すという発想からいまだに抜けきれないでいます。

環境についてはどうでしょう。これは戦争によつては解決できません。海の死滅、酸素の減少、熱帯雨林の減少、このままだと生き物が生息できない星になってしまふ。しかし国や企業の利権がからんで、環境問題も根本的な解決には至っていません。

(3めんにつづく)

核の連鎖の危機

では何処にお金を費やしているのでしょうか。軍備です。武器を作り売買している。莫大な軍事費です。まさに第三次世界大戦前という状況です。この戦争を止められるでしょうか。安いオイルの時代は終わり、失業率は高まり、庶民は借金だらけになっていく。他者への暴力の危険が高まり戦争を仕掛ける動きが顕在化してくるでしょう。

では、どうしたらよいでしょうか。それは徹底的な話し合いであり、国際法、条約、国連の活用です。そのための解決のキーは「核」です。廃絶の方向に前進をつくりだせなければイランの核保有、サウジアラビア、エジプトへと核の連鎖が起きる危険があります。とにかく徹底的な協議が必要です。

チャンスを生かさう

軍人は常に生きるか死ぬかを考えています。しかし平和運動の人はそこまではいいない。命がけにはなっていない。



こういうなかで黒田征太郎さんが「議定書を読む絵本」を作ったのは、たくさんの人が核廃絶のために真剣にならなければだめだと思っただけです。議定書を誰にでも分かるものにしなればと思っただけです。この本は二万部広げられています。

いま核を操り富を蓄積してきたエリートのたちは危機感を持っていません。それはテロの危険など、本当に核を使うことを躊躇しない人たちが存在するからです。その意味では今チャンスです。署名をいくらしてもムダでムナシイとか何も変わらないと思う市民は多いのです。しかしサッカ

ーゲームを御覧なさい。九〇分の戦いのなかで、シユートするチャンスはほんの数秒な

問題提起

市民運動どのような役割を果たしてきたか

高原 孝生

NPT(核不拡散条約)に

しても米口交渉、CTBT(包括的核実験禁止条約)にしても核廃絶に大きな進展を生むという方向は打ち出されていません。二〇〇五年のNPTは失敗でした。果たして運動は無効だったのでしょうか。

ニューヨーク州立大学のウィットナー教授は『核廃絶運動の歴史』のなかで運動は無効ではなかった。さまざまな市民運動のお陰でなんとか核を使わずにきたと強調しています。

原爆投下直後から科学者や宗教者など、「原爆使用はどんな理由があろうとも間違いない」との主張がだされました。ビキニ事件により核兵器の脅威が伝えられ大きな運動につながりました。核実験を完全に止めることはできませんでしたが地下に移す、限界はあ

んです。ですから私たちも核をなくすチャンスをぜひとも活かそうではありませんか。

りながらも部分的核実験禁止条約を結びました。

その後のNPT、七〇年代のSALT(米ソ戦略兵器制限条約)、八〇年代のINF(中距離核戦略全廃条約)、九〇年代START(戦略兵器削減条約)などいずれも米ソをはじめ核保有国が率先して結んだのではなく、市民世論と運動の影響がありました。

一方、日本は広島・長崎の破壊の体験を持ちながらも、これへの報復としての軍備、

被爆者として訴える

山田 玲子

核保有にはすみませんでしたが。逆に戦争を拒否し、原水爆の破壊をふたたび繰り返させないとのメッセージを発信してきました。被爆者を先頭にした日本の運動の役割は重要です。

こうした点を押さえつつ、いまの日本では非核三原則をいいながら核の傘に依存し、核密約がはつきりしても怒りの世論がまきおこらない状況もあります。被爆者が訴えつけてきた「核は誰に対しても使ってはいけない」「国防の手段にしてはいけない」ということが世界の規範には未だなっていないのです。これまでの運動の成果を評価しつつも、さらに核廃絶実現への課題は大きいのです。(明治学院大学平和研究所)

八月六日、小学五年生のとき広島で、二・五キロで被爆しました。その日は学童疎開のために校庭にいてB29の飛行機雲をきれいだなど眺めたそのとき、ピカッと閃光をあ

び何も見えなくなりました。走り逃げる背中に爆風が襲い掛かり転げました。空が暗くなりいきなり激しく雨が降ってきてずぶぬれになりすごい(4めんにつづく)

(3めんからつづく)

寒気に襲われました。

父は爆心から一キロで、姉は広島駅のプラットフォームで被爆し傷だらけでした。

私のいた己斐の町にはたくさんの方が避難してきて死にました。死体を校庭で二千人くらい焼きました。翌年、食べ物がないので芋を校庭に植えたとき骨や髪の毛がたくさん掘り出されました。収穫した芋は誰も食べませんでした。

東京の被爆者の会の結成宣言には、被爆者であることを

第三次世界大戦を止めるために

アーサー・ビナード

私たちは戦前を生きていると認識しています。各国の軍事予算の増加もそれを示しています。危険感を訴えるといふみんな引いていきます。どうしたら皆を遠ざけないように話せるかを考えています。

核抑止はとづくに賞味期限が切れた噴飯物ですし、今の社会は、もはや専門家まか

唯一の共通点として協力し健康を保持し、核兵器のない平和な世界を、祈りにも似た悲願を持ち運動を続けるとあります。

被爆者は、その体験を語り核兵器のない世界を訴えつづけています。私も一三回海外に出かけました。今回ニューヨークでは、国連本部ロビーで原爆写真展を開きます。被爆体験、生き残った不安、苦しみとともに生きてきたこと、核のある限り誰でも被爆者になりうることを訴えます。(原爆被爆者豊島区の会長)

ウトです。核は自分とは関係ないと思っている人は結構いますが、いったん使われれば皆がとんでもなく関わってしまふ。人類の数千年の文化、歴史が終焉するのです。

よく、詩人なのに政治的な話をするとか、反米的といわれます。詩人だからこそ言葉が大事にします。言葉は時の政治や社会により蝕まれ壊されていく。だから黙ってられない。アメリカ人として国を愛しているから黙っていられません。とにかくお金、利権や利益のために軍備をつ

東アジアの共生をのぞみ戦後補償を考える

石田 隆至

東アジアの和解と共生をテーマに戦後補償の問題をやっています。

最初に第五福竜丸被爆への補償について触れます。このときアメリカは、被害についてきちんとして調査せず、法的な根拠に基づかず、日本政府も受け入れてそれなりの金額で決着をつけてしまいました。これはその後の日本政府のア



くり紛争や戦争をつくりだすことをやめさせましょう。

アジア諸国への戦後補償の原型になったようにも思われま

す。日本の加害にたいする補償について法的責任や反省はあいまいなままに、賠償金ではなく見舞金という形でおこなおうとした。慰安婦問題では殆どの人が受け取りを拒否しました。中国人連行の花岡鉦山の事

件では、裁判により鹿島建設が被害者に謝罪し和解となりましたが、一人の原告のうち三人はこれを拒否しました。

日本の戦後補償の姿勢は、相手の人格や人間の立場に立ったとはいえない決着に終始しています。

一方で、いま中国や北朝鮮の脅威については強調される状況が作られています。中国は非核国には核を使わないといってきたましたが、東アジアの共生の視点や世界の動きをよく見ていく必要があると思います。(亜細亜大学・日本女子大学非常勤講師)

あなたの街で第五福竜丸パネル展をひらきませんか

— 展示パネル 20 枚組、36 枚組、42 枚組、大型展示セットなど。現物資料の貸出しもあります。費用その他は事務局までご相談ください —

マーシャル、巡礼と巡回写真展〈下〉

島田 興生

甦った無住の島・メジャト

メジャトを訪れるのは六年ぶり。島内を歩きながら感激したのは島じゅうにあふれる緑、それも食用植物が圧倒的に増えたことだった。ヤシ、パンの木、

ター機で迎ひな島に来るのは尋常ではない。この大切な集會に立ち会えることをスウィンリイさんは「グッド・チャンス」と言ったのだ。

バナダナス、バナナ、カボチャやスイカ。二五年前には砂丘に数十本のヤシが生えるだけの無人島が、島民の努力によって島を見事に再生させた。屋根にはソーラーパネル、夜には暗いながら電気が点灯し、衛星電話設備もある。客に出すヤシジュースの習慣も復活した。子どもたちの眼は純朴な可愛さがただよい、生活の落ち着きとともに、しつかりしつけがなされていることをうかがわせた。

集會は夜二時から翌朝三時まで続いたが、約七〇人の参加者の表情はこれまでになく厳しく真剣だった。私は早朝出発なので途中退場し、集會の模様を翌朝スウィンリイさんに聞いた。

八五年五月に全島民がロンゲラップ島を脱出後、アメリカ政府は残留放射能表土の汚染除去を行い、九六年から発電所、埠

頭、滑走路、海水転換水道、道路などインフラの整備を進めてきた。すでに建設された九戸の住宅に、今年と来年に二〇戸、また小学校や診療所の建設が終われば帰島準備は完了する。米議会はすでに昨年一〇月「インフラ終了後は島民はすみやかに帰島するよう」勧告を出した。スウィンリイさんによれば、島民の七〇〜八〇％は帰島に反対だという。「安全宣言」を信じて帰島した一九五七年には被曝者と一緒に帰島した一九〇人も被曝。同時に米エネルギー省医師団の「定期健診」が始まったが、流・死産や甲状腺障害などの病気に放射能との関連を指摘されながら放置され、とくに孫の世代への対策はいまも放置されたまま。年末の村長選の反対



ロンゲラップ帰島問題を話し合う

派を意識してか、村長の発言は慎重だが、今年中には帰島の是非をめぐる住民投票も予定され、投票時にはこうした不審を埋める対策が取られ、帰島が現実のものとなってくる可能性がある。

マジュロ町役場で写真展開催

イバイへの帰路の船旅は向かい風で、往路よりはるかにきつかったが、腰を少し痛めただけで一五日夕方イバイ港になんとか帰着。

翌日長女のドロシイさんと夫のイルーネさんと一緒にジョンさんのお墓参りに行った。イバイで最も会いたかったの

は「マーシャルの子どもたち」の幼いヒロイン、ロージエンちゃん。ロージエンさん(二六歳)は養父ネルソンさんが残した家で、夫のパリックさんと三人の子や叔母と暮らし、家の一角に作った小さな店のレジをしていた。幼い頃の印象は少し残すものの、今は「たくましくマーシャルのお母さん」で、写真絵本に撮られたことの自分と同じ年頃の子育てに奮闘していた。

一八日午後、イバイからマジュロ島へ移動。マジュロでは予定通りロンゲラップ村役場の一階ロビーで現地のビキニデーにあわせ一月二八日から三月中旬まで写真展を開催。

マジュロ滞在中は連日会場に通った。役場のロビーはロンゲラップの人びとや被曝者の日常的なたまり場になっている。熱心に写真を見つめる女学生の姿、「もつとイクスポーズ(被曝者)の写真が欲しい」と言った役場職員言葉も記憶に残った。今年五月は島民がロンゲラップ島を脱出した二五年目の節目の年。写真パネルが現地に大いに利用されるのを願ってマジュロを後にした。(フォト・ジャーナリスト)



移住当時の砂丘の島が25年の努力で緑豊かに木々の繁るメジャト島に

この夜小学校で、マタヨシ村長を迎え集會が開かれた。普段は都市のマジュロ島で暮らしている村長が片道とはいえチャ

企画展を観る

『原爆の子』と片岡 脩さん

一九五一年に刊行された手記集『原爆の子―広島少年少女のうったえ』（岩波書店）は、「原爆記録文学」の中でも初期のものです。

生活綴り方教育の中から

当時GHQによるいわゆる「プレスコード」により、原爆被害にかかわる記述や報道が禁止されていました。詩人・作家たちが「書いても出版できない」状況の中、一九四七年頃から広島の小学校教育、中本剛さんが綴り方教育を通して被爆体験をした子どもたちの生活の基底にあるもの、原爆によって破壊された生活を書く作文教育運動が始

まっています。

『原爆の子』は、ペスタロッチ研究で知られた教育研究者であり、自身も一・六キロで被爆した長田新さん（広島大学教授）によってそれらが集大成されたものです。

手記は広島各学校や孤児収容施設、宗教施設などの協力により一七五人から寄せられ、一部は雑誌「世界」一九五一年八月号に掲載され、代表的な一〇五編が単行本に収録されました。長田さんの四〇頁にわたる序文の中には収録されなかった作文も紹介されており、その中には漫画『はだしのゲン』の作者、中沢啓治さんの手記もあります。

思い出したくないが…

一三歳で被爆し、高校三年生で書いた片岡脩さんの手記は、ロシアの思想家ゲルツェンの言葉を引用し、戦争によって犠牲となり迫害された人

びとについても言及しているもので、最後には「もうこれ以上は書けない」と未完のままにしめくくられています。片岡さんは爆心から八〇〇メートルの旧制県立第一中学校（現・国泰寺高校）で被爆し、多くの級友を亡くしました。犠牲になった友を助け出せなかつた苦しみを手記中でも吐露しています。この手記は、その後『原爆の子』を映像化する新藤兼人監督、同じくこの本に着想を得た『ひろしま』（関川秀雄監督）のスタッフも感銘を受けたといっています。

世界で読み継がれる

『原爆の子』の出版は大きな反響を呼び、京阪神では大阪大学理学部を中心とする「原爆の子」にこたえる会」が結成され、「原爆の子にこたえよう」少年少女たちのねがい」が刊行されました。また手記を書いた子の親睦会「原爆の子友の会」「きょう竹会」が結成されました。海外でも、エスペラント語版をはじめとして現在までに一三言語に翻訳され、読み継がれています。（編集部）

新刊紹介 岩垂弘著

『核なき世界へ』
同時代社刊

本書は、朝日新聞記者時代から原水爆禁止運動と核問題を多く報道してきたジャーナリスト、岩垂弘さんによる「核なき世界」へのメッセージです。三〇年以上にわたる運動の取材と分析をタテ糸に、市民運動や沖縄の運動、護憲運動など広範な運動を論評しています。

とりわけ、五六年前の第五福竜丸事件が原水禁運動の発端となり、その高揚のなかで日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成され、生活協働組合の平和運動が結集していったさまを分析し、「被爆・被ばくの証人」として第五福竜丸が保存されたことを評価しています。

また、オバマ大統領のプラハ演説以来、核兵器廃絶の世論が活発化していることを一定の前進としつつも、これは五〇年以上の被爆者、反核市民運動の成果であり、その

役割を評価すべきであると述べています。

一方、政治家やメディアが「唯一の被爆国」という表現を使い続けることに苦言を呈します。広島・長崎の原爆によって被爆したのは日本人ばかりではなく、外国人被爆者の存在を忘れてはならない。「ビキニ事件」にしても第五福竜丸乗組員だけが被害に遭ったのではなく、実験場となったマーシャルの人びとを忘れてはならない、と指摘しています。

最終章は、「反核・反戦・平和に生きた人びと」として、一四人の方々（いずれも故人）を紹介しています。前著『核』に立ち向かった人びと（日本図書センター05年刊）と合わせて、若い世代で平和のとりくみをすすめる人たちにもぜひ読んでほしいと思います。（B6版256頁 1900円+税）



協会顧問 森 一久さんを偲ぶ

公益財団法人第五福竜丸平和協会

代表理事 川崎 昭一郎



長く第五福竜丸平和協会の評議員を務められ、公益財団法人への移行を機に顧問に就任された 森 一久（もり・かずひさ）さんが本年二月三日に亡くなられた。八四歳でした。

森一久さんは、京都大学理学部物理学科で湯川秀樹さんの下で素粒子論を学ばれ、卒業後はアカデミックなコースではなく学問を活かしながらジャーナリストの道に入られた。原子力平和利用の将来について当初より強い関心を抱かれました。

若い研究者に呼びかけ「原子力談話会」を組織し、また、湯川秀樹さんが原子力委員を引き受けられたときは相談相手になった。

日本原子力産業会議（原産会議）の設立にも参画し、大御所諸先生方や関係政治家の信頼を得て、事務局長として運営に当たられた。

原子力行政の指導者たちからも尊敬され、原産会議では専務理事、副会長を歴任された。

原子力を知る生き字引のような存在だった。自らも広島爆心地一キロでの原爆体験があり、

「原子力は大変なものだ、これはちゃんとやればすこいけれど、ちゃんとやるのは大変だ。原子力をちゃんとやるのが大事だ」とやるのが大事だ」という信念を、生涯を通じて貫き通された。

「原子力は大変なものだ、これはちゃんとやればすこいけれど、ちゃんとやるのは大変だ。原子力をちゃんとやるのが大事だ」とやるのが大事だ」という信念を、生涯を通じて貫き通された。

広島、長崎に続く第三の被爆ビキニ水爆で被災した第五福竜丸の保存、展示をすすめる第五福竜丸平和協会の役員の中で、原子力平和利用を進める立場の森さんは異色の存在だったが、森さんを良くご存知の方にとっては特に違和感はなかったに違いない。

事実、二十数年にわたる評議員就任期間を通して、非常に地道に誠実にその役目を果たされた。

最近では、『図録・写真でたどる第五福竜丸』（二〇〇四年三月一日発行）の中で「水爆実験と日本の科学者」と題する分かりやすい啓蒙的な解説を書かれ、二〇〇八年二月二四日の三・一ビキニ事件記念のつどいでは、「ビキニ事件と当時の科学者―湯川・三宅・田島・檜山・猿橋ら先達の信念を偲ぶ」と題して講演された。

第五福竜丸につながれたのは、三宅泰雄初代会長を通じてである。同じ広島出身で医者の家系という点で共通していた。

森一久さんのご冥福を心からお祈り致します。

か第五福竜丸」の投書を送った武藤宏一さん（故人）の妻・美沙子さんと娘の真澄さんが家族を連れて来館しました。

展示館来館日誌

◇2月18日 第七事代丸を建造した和歌山県古座町（現串本町）古座造船所社主の植村直太郎さんの娘・東山温美さんと孫の黒川祐子さん、曾孫の黒川怜弥君が来館しました。

◇古座で事代丸の建造に携わった船大工の西田繁三さんが、2009年度地域伝統文化功労者表彰（伝統文化活性化国民協会）を先ごろ受賞しました。この機会に建造に使った道具一式約30点が串本町に寄贈されました。同町は今夏開催する第五福竜丸展でこれらの道具を展示する予定です。

◇3月7日（日）午前、前日の3・1ビキニ記念のつどい市民講座（2～4頁参照）で講演した、広島平和文化センター理事長のスティーブン・リーパーさんが

来館しました。協会が所蔵する久保山愛吉さんへの手紙の中に、台風で座礁・沈没し多数の犠牲者がでた青函連絡船「洞爺丸」に積まれていたものがあります。リーパーさんの父親（牧師）は、洞爺丸で遭難死しています。作家の三浦綾子さんの小説「氷点」にその模様が描かれています。来館していた静岡大学元学長佐藤博明さん、静岡大学名誉教授本多隆成さんらも同席し、手紙が海中から引き上げられ、乾燥させたのちに東京の病院、焼津の久保山家へと届けられた顛末に耳を傾けました。リーパーさんは感慨深げに見入っていました。

◇3月18日 核物質管理国際会議に参加したプリンストン大学フランク・フォン・ヒゲル教授らアメリカ、インド、ノルウェーなどの研究者が来館。安田事務局長が案内しました。

◇3月26日 朝日新聞に「沈めてよい

刊行案内

世界における平和のための博物館

執筆 山根和代、山辺昌彦
編 平和のための博物館市民ネットワーク

2008年10月に京都で開催された国際平和博物館会議の編纂された資料をもとに日本国内の博物館紹介を補強して刊行されました。海外の平和博物館135館、福竜丸展示館など国内66館、広義の平和博物館40館が紹介され平和博物館の手引きガイドブックとして利用できます。A4版96頁 頒価700円送料100円。展示館からも郵送します。

焼津・清水市長と懇談

4月12日、協会の安田和也事務局長と市田真理学芸員は、焼津市役所を訪ね清水 泰市長と懇談しました。

同市長は、平和市長会議への参加、広島・長崎につづく焼津の核被害を平和へのアピールに活かしたいと語り、船大工・近藤友一郎さん（08年死去）製作の第五福竜丸五分の一模型を市が買い上げるなどの構想について紹介しました。

協会からは、第五福竜丸やマーシャル核被害の展示会、第五福竜丸事件の世界史的意義を伝える教育的なとりくみでの協力を要請しました。また歴史民俗資料館の近藤道子館長とも懇談しました。

満開の八重紅大島桜の下で



4月4日、恒例となった「お花見平和のつどい」（第五福竜丸から平和を発信する連絡会主催）が10回目を迎えました。時折冷たい風が吹き午後には小雨がぱらつく生憎の天候でしたが、各団体からの活動紹介のパフォーマンスやNPT再検討会議にあわせて行われるニューヨーク行動への参加者の紹介、わいわい広場での語り合いなど、なごやかに行なわれました。

協会からは、安田和也事務局長が今年の企画展を紹介し、つづいてエンジンにサビ止め薬を塗布するボランティア活動を続けている埼玉の青年、中村勇太さんらによる薬塗りのデモンストレーションと活動報告が行なわれ、参加者から大きな拍手が贈られました。

3・1ピキニデー関連行事への参加

今年も第五福竜丸が被災した3月1

日、ピキニデーに関連して、第五福竜丸平和協会の記念のつどいをはじめ焼津や静岡で多彩な行事が催されました。

静岡・焼津での行事には協会から安田事務局長と「マーシャルの子どもたち55プロジェクト」事務局の土屋菜奈さんが参加。28日には静岡でピキニ被災の全容解明をめざす研究交流集会在開かれ、フォト・ジャーナリストの豊崎博光さんがマーシャル諸島の被曝者の現状を報告、メジャット島に住むロンゲラップの住民の帰島問題がうごきつつあるなど興味深い最新情報も紹介されました。

3月1日午前には故久保山愛吉氏墓参行進がおこなわれ、市内トコ箱会館く焼津カマ・ボックス>で開かれた島興生さんの写真展「水爆の島マーシャルの子どもたち」（焼津市民ネット主催）、焼津文化センターでの3・1ピキニデー集会では、「マーシャルの子どもたち」の普及をよびかけました。

2月27日には三重県伊勢市にある第五福竜丸が「はやぶさ丸」に改造された強力造船所<現ゴーリキ・マリンヴィレッジ>で、コープみえの主催による学習会が開かれました。展示館から市田真理学芸員が講演、改造に携わった船大工の木村九一さん、吉岡雄毅さんの話もあり、紀伊半島と第五福竜丸の不思議な縁についても語られました。また敷地内にあるゴーリキアイランドの事務所の壁に、改造時に廃材となった第五福竜丸の魚倉の一部が使われていることが紹介されました。

協会顧問・吉田嘉清さんがエストニア赤十字勲章を授章

1986年4月26日に発生したチェルノブイリ原発事故による放射能除去作業に従事したバルト3国の2万人余の被曝者の救援活動をつづけてきた「エストニア・チェルノブイリ基金」スタッフ代表の吉田嘉清さんに、このほどエストニア赤十字勲章が贈られました。

同基金は、1990年、元環境庁長官・大石武一さん、元東大教授・草野信男さ

ん、物理学者の服部学さんら18氏のよびかけで発足。市民や企業によびかけての募金活動、医薬品、医療器具の贈呈や被曝者を招いての検診、医師の研修などをおこなってきました。

授与式は3月24日に東京のエストニア大使館でおこなわれ、「エストニアの人々の命を救うために貢献した人に贈る」という赤十字勲章が手渡されました。

2005年と08年秋には、招聘した医師や被害者の会代表が第五福竜丸展示館を見学、「被曝の悲劇を繰り返すまい」と協会役員と交流しました。

吉田さんは、「とにかく続け、たくさんの方が支援を上げてくれたことが大切でした。展示館への見学はとても印象に残っていました。」と語っていました。

福竜丸とともに口笛コンサート

3月27日午後4時から、「しあわせのくちぶえ〜小林まり子口笛リサイタル」が開かれました。このコンサートは、2008年に国際口笛コンクール成人女性の部で4位に入賞した小林さんと所属の合唱団「青い鳥」（栗友会）の友人たちが、ぜひ第五福竜丸とともに平和を願い演奏したいと共同で催したものです。

栗友会主宰の合唱指揮者栗山文昭さんも来館し安田学芸員とトーク、口笛ソロの演奏のあと「青い鳥」の合唱との合同演奏もおこなわれました。

第五福竜丸保存に尽力協会顧問・三井周さん逝去

東京建設従業員組合（東健従）の専従として書記長を長く勤め、第五福竜丸の保存の当初から江東区で牽引役として活躍された三井周さんが、3月8日に亡くなりました。80歳でした。三井さんは第五福竜丸平和協会設立とともに評議員に就かれ昨年顧問となりました。ご冥福をお祈りします。